

真実の戦うキリスト教徒としての純粹詩人ジョン・キーツ (1)

奥田喜八郎*

On a True Love-Poet: John Keats As an Actual Fighter for Christianity (1)

dedicated to Mr. Kazumi Yano I have been studying under,
with my prayer full of piety—
I do wish to express my deep appreciation for his words of wisdom.
I am sure that “Dr. Yano is not of an age, but for all time !”

Kihachiro OKUDA*

Abstract

Most people here in Japan like John Keats as the poet better than as the man. They seem to love “the stillness” in some of Keats’s poetry: for instance, ‘No stir of air was there’. It probably reminds them of “the quietness” in Bashō Matuo’s poetry (Haiku).

John Keats was of a family of a moderate and humble condition. Unfortunately, he was an orphan when he was 15 years old. Keats was first interested in studying medical science, but he didn’t keep at making efforts to learn it for long. He gave himself up completely to poetry. Keats became a great poet of Romanticism not only in Great Britain, but also in European countries and in Japan, too. It is well known that John Keats loved “beauty”, and “rest (or stillness)”. In 1813, Keats read Edmund Spenser (1552?–99)’s *The Faerie Queene* (1590–96), and then he was enslaved by *The Faerie Queene*’s beauty. He was entirely a slave to *The Faerie Queene*’s love, too. Needless to say, John Keats read Spenser’s *Shepherds Calender* (1579), and then he also studied nature earnestly.

On the other hand, John Keats read other writers of the Renaissance. He exceedingly loved George Chapman (1559?–1634), John Fletcher (1579–1625), and John Milton (1608–74). In particular, John Keats, only in his later years, seriously studied his senior poet, John Milton as the puritan, and then he examined love, nature, and severe Puritanism very carefully as well. Emile Legouis and Louis Cazamian in France said in *A History of English Literature* (1960) that “Religion for him (Keats) takes definite shape at an early age, in the adoration of the beautiful” (p. 1059). I think that this

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

was a very penetrating remark they made, so that I'd very much like to say in other words that Puritanism for Keats took definite shape in his later years, in the adoration of the beautiful, and of the erotical, too.

God knows that poets are born, not made, even though Francois de Malherbe (1555—1628) said that “Poets are made, not born”. Heaven knows that John Keats was a great poet of *Odes*: “Ode to a Nightingale”, for example. Keats wrote, besides, his great *Sonnets*. I think that he wrote more than twenty sonnets. One of the best is, naturally, “On First Looking into Chapman's Homer”. Yes, indeed, this is a very sweet, and exciting love-sonnet, but I am also interested in a sonnet, entitled “The Day is Gone”, in which a man (I think he is probably John Keats himself) dreams of his first white love in the past, the present, and the future with his great pure sympathy, but she, she, she is just loving her sweet-heart in her dream !!!

Vanis'd unseasonably at shut of eve,
When the dusk holiday—or holineight
Of fragrant-curtain'd love begins to weave
The woof of darkness thick, for hid delight;

What do you think her dream, after reading these lines? How erotical her dream is! What a sexual love in her dream it is! I wonder at her dreaming that! Can you wonder at it ???

It is probably true that John Keats taught us to think and to feel like Pagans, not like Christians. Yes, in fact, Keats as the true love-poet, particularly in his later years, did this only in a beautiful and erotical way. Certainly, this looks like some of William Shakespeare (1564—1616)'s sonnets, but I should like to think that this also looks like John Milton's Puritanical ideas: his *Areopagitica* (1644), and *Paradise Lost* (1667), for examples. Of course, Edmund Spenser's *The Faerie Queene* has a great influence on Keats's sonnet.

I have been always wondering what is Paganism in Keats's poetry? What is Christianity? What is Protestantism? What is Puritanism? What is Eros?... These important problems, to be sure, must be investigated further and further. These new problems are right now under my own study, entitled “On a True Love-Poet: John Keats As an Actual Fighter for Christianity”. I, in the result, have a good (or a high) opinion of John Keats's Christianily that might have been usually mixed with Paganism (Eroticism) in some of his poetry !!!

But, as I've read love's missal through to-day,
He'll let me sleep seeing I fast and pray.

These are the last two lines of the sonnet, “The Day is Gone”. Keats's conduct is really Christian. His Christian conduct is truly wonderful, isn't it?

To our regret, a disease killed John Keats as the Champion of Christianity at his early age of 26. He died young, very very young, in 1821.

KEY WORDS : *Sonnet, Romanticism, Love, Beauty, Eros, Christianity, Paganism, Puritanism*

“Sonnet”（「ソネット」「14行詩」）という語は、16世紀の中葉頃、正確に1559年に、はじめてイギリスに導入された語である。これは、フランス語の“sonnet”からそのまま借入されたものなのである。このフランス語の“sonnet”はイタリア語の“sonnetto”から借入されたものであって、これは“suono”から派生した語である。これは、もと、ラテン語の“sonum”から音法的に発達した語であって、“sound”という原義を有するものである。それに“-et”という「接尾辞」が、のちに、付けられたものである。これは主にフランス語系の「指小辞」である。たとえば—bullet, fillet, islet, sonnet—といった風で使用されるものであるのだが、しかし、たとえば—hatchet, packet, pocket—などは、どうした訳か、「小」という意味を失ったものなのであることに、注意しよう。

このように、“Sonnet”という語のルーツをたどってみると、どうしても、「小唄」とでも日本語に訳してみたくなるのだが、これはどんなものであろうか。これは、ご存じのように、江戸末期からはやり出した俗曲の一種で、三味線の音に合わせて歌う、「小唄」であるから、思い切って、「小歌」とでも訳そうか。これはその昔、民間に流行した俗謡のことであって、特に室町時代以後の時世風の「小歌」であるのだが、しかし、別に「短い歌」とか、「大衆向きの俗謡」といった意味を有する「小歌」でもあるからである。このほかに、「小謡」と訳してみるのも、面白いかも知れない。と言うのは、これは謡曲や、狂言などの中でうたわれるものであって、一種の節、またその文句の含意する「小謡」であるからである。

“Sonnet”の“-et”という「指小辞」を考慮した上で、「小唄」「小歌」「小謡」という日本語訳なのであるのだが、またこの方がかえって、「ソネット」と訳してしまうよりも、読者に理解されやすいものであると思われるからである。しかし、どうも「情感の

おもむくがままにふと口をついて歌われた」と思われる「小唄」であり、また「小歌」であり、更に「小謡」である。ことを思い併せてみると、“Sonnet”の有する「形式の厳格さ」や、「約束ごと」などを思い出してみると、「知の尺度」をなによりも重要視するラテン語系の民族の気質とでも言おうか、かれらの好みと、それに対して、「情感の自然な流れ」を殊の外重要視するわが日本人の気質と、好みとを比較検討してみるのも、興味の尽きない研究分野なのであるのだが…。しかし、それにしても、別に“sonneteer”という、「ソネット詩人」という意味のほかに、通例、軽蔑的に「へぼ詩人」とか、「二流詩人」とかという意味を有する語であることを思い合わせてみると、「下手の横好き」といった趣があって、日本の「端唄」といった感もある。これは江戸末期に、町人の中で流行した俗謡の一つで、露地裏屋で、三味線に合わせてうたう、隠居の面影が髭髯と惚ばせてくれのであるが…。

“Sonnet”はもともとイタリアの詩人ダンテ (Dante Alighieri, 1265 – 1321) や、ペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304 – 74) などをはじめ、「恋愛」を主題として詩に用いた形式なのである。たとえばダンテの『新生』 (*La Vita Nuova*, 1290 – 94) をひもといてみると、そこには20行詩もあれば、16行詩もあり、またその他いろいろな形式が当時、すべて、“sonetto”という名で呼ばれていたのである。「相聞」の情を切実にうたい上げたと思われる詩形“Sonnet”は、イギリスでは、16世紀の詩人であり、外交官であったワイト (Sir Thomas Wyatt, 1503 ? – 42) や、詩人サリー伯 (Earl of Surrey, Henry Howard, 1517 ? – 47) などによって、はじめて紹介された「ソネット」なのである。本来は複雑な押韻構成であったのだが、イギリスの詩人たちはそれを随意的構成にゆるめて、愛用しているうちに、技巧的に工夫されて、自ずからある種の、それもイギリス人好みの押韻構成に定着する

ようになったのである。イギリスに於ける「ソネット」を眺めてみると、だいたい3種類に大別することができようか。勿論、「ソネット」は、「14行詩」の構造に変わりはないのである。しかも、各行はそれぞれ、かならず、「弱強調5歩律」(iambic pentametre)を基本とするものなのである。下記に

それを紹介しよう。

(I) 先ず、イタリア風ソネット (Italian Form) がある。これは別に、ペトラルカ・ソネット (Petrarchan Sonnet) とも言う。これを、先ず図式で示してみると、――

			脚韻	
Octave or Octet	第1行 2 3 4	Quatrain (起)	a	詩想の上潮 (上昇)
			b	
			b	
			a	
	5 6 7 8	Quatrain (承)	a	
			b	
			b	
			a	

Sestet	9 10 11	Tercet (転)	cc	退 (下降) 潮
			dd	
			ec	
	12 13 14	Tercet (結)	cd	
			dc	
			ed	

☆吉竹迪夫著『愛誦英詩選』(中教出版, 1976年)より。

――と言うのがこれである。ご覧の通り、14行を全部合わせて1つの詩品なのである、と見る場合と、その14行を、「4, 4; 3, 3」と言った風に区切る、4連型式の作品である、という見方もできるのであるが、しかし、両者は全く同じものなのである。いずれにしても、詩想上ははっきりとした段落のつかぬまま、第14行目まで流動しながら、ひとつの詩想、すなわち「恋愛」をうたい上げるソネットは、別に「無連詩」(non-stanzaic poem)と言われているのである。

ところで、「Sonnet」という詩型は、上記の吉竹氏の図式の示す通り、「Octave」(8行)と「Sestet」(6行)とに分けられていて、その「Octave」はご覧のように、2つの「Quatrains」から成り立っているのである。すなわち、「abba / abba」と言った押韻が使用されているのだ。これは多くの Petrarchan Sonnet に固定している型式なのである。しかし、これはまれに、「abbc / acca」といった押韻が変化することもあるのである。「Sestet」は2つの

「Tercets」から成り立ち、「cde / cde」と押韻するのであるのだが、しかし、この部分は変化が許されていて、たとえば「cdc / dcd」, また「cde / dce」, 「cdd / cdc」, また「cdd / cee」, あるいは「cdc / dee」――といった風に脚韻が、それぞれの詩人たちの好みに応じて、使用されているのだ。イギリスの女流詩人であり、随筆家でもあるメイネル (Alice Meynell, 1847 - 1922) の「Renouncement」は、「cde / cde」と言う押韻が用いられているのは有名である。しかし、イギリスのロマン派の詩人キーツ (John Keats, 1795 - 1821) の「In the Field」は、「cdc / dcd」と言った押韻が使用されているのである。

思うにヨーロッパの14行詩「Sonnet」はその詩想を鑑みてみると、正に東洋の「絶句」のそれによく似た作品である。いわゆる、――「起承転結」――に配列されている詩形「Sonnet」である、と見るのが一般的である。吉竹氏の図式の示す通り、最初の「Tercet」は、すなわち、「起承転結」の「転」

に当たるものであって、ソネットに於ても、ここでは詩想が転ずる、最も重要なポイントなのである。これはまた、あたかも4コマの漫画の第3コマ目のそれに当たる重要な個所でもあるのだ。

(II) 次に、イギリス風ソネット (English Form) がある。これは別に、シェークスピア・ソネット (Shakespearean Sonnet) とも言われている。これは、(I) のペトラルカ・ソネットのように、“Octave” と “Sestet” とに大別することがなく、3つの “Quatrains” と1つの “Couplet” から成り立っているソネットなのであることに、注目しよう。脚韻は「abab / cdcd / efef / gg」と言った押韻なのである。

サリー伯はその昔、ペトラルカ・ソネットをイギリスに紹介し、そして工夫を凝らしてイギリス人好みに按配して、変化を試みた。その結果、サリー伯はあらたにイギリス風ソネットを創始した。勿論、すでに、シドニイ (Sir Philip Sidney, 1554 - 86) や、ダニエル (Samuel Daniel, 1562 - 1619) などの詩人たちがこれを使用していたのだが、のちにシェークスピア (William Shakespeare, 1564 - 1616) が、あの有名な154篇のソネット集をこれによって、不朽のものとしてしまったために、後年、それがシェークスピア・ソネットと呼ばれるに至ったのである。思うにこのシェークスピア・ソネットは、韻の数の少ないペトラルカ・ソネットと較べてみると、どちらかと言うと非常に容易であるのだが、しかし最後の2行はどうも警句的な内容になりがちである。また “Couplet” で終るために、前の12行と遊離してしまう傾向があって、ややもすると、詩想の流れの配分に困難さが付きまといそうである。内容的には、ペトラルカ・ソネットの持っている、いわゆる「起承転結」をうまく導入していて、大いに成功している作品も多く見受けられるのであるのだが…

(III) 最後に、スペンサー・ソネット (Spenserian Form) というのがある。これは、ペトラルカ・ソネットと、またシェークスピア・ソネットとの中間の型式のソネットなのである。押韻は「abab / bcbc / cdcd / ee」と言った風に使用されているものであって、御覧の通り、“Quatrains” が同じ

韻で連なっているのだ。これはイタリア風ソネットのそれなのであるのだが、しかし、次の “Sestet” が “Quarain + Couplet” であることに、注意しよう。これはイギリス風ソネットのものである。この “Quarain” もまた、前のそれと同韻で連なっているのであるから、“Octet” と “Sestet” とには、判然と分かちがたい個所である。スペンサー (Edmund Spenser, 1552 ? - 99) は、『相聞小曲』 (*Amoretti*) の88篇にこれを駆使したために、スペンサー・ソネットと名づけられたのだ。これはまるで、「和洋折衷」を振って、「英伊折衷」によるソネットであると言えよう。

古代ローマン人たちは切ない恋心をうたい上げることによって、出来上った「小歌」が、のちのイタリアの詩人たちによって、より完璧な形での「恋愛」のソネットとなり、それがフランスを経て、イギリスに導入されたのである。特に、サリー伯によって、イギリス風ソネットの基盤が育てられた。そしてシェークスピアによって、それが不朽のものとなった。ミルトン (John Milton, 1608 - 74) もまた、ソネットの詩人と言われる程、ソネットの形式を愛したのであるが、ミルトン以後は、残念なことに、ソネットの詩形が使用されることもなく、150年の歳月が過ぎ去ってしまうのである。

ふたたび、ソネットが重要視されるようになったのは、ロマン派の詩人たちによってである。特にイギリスのロマン派を代表する詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770 - 1850) や、キーツなどの詩人によって、長い間忘却されていたソネットがここに復活し、すばらしい玉詩が次から次へと誕生したことは、銘記されるべきであろう。ミルトン以後の、約150年もの間、省みられることのなかったソネットをもう一度、イギリス文学史上に甦らせた、上記のロマン派の詩人、すなわちワーズワースや、キーツなどの功績は多大のものであり、この2人の手柄は特筆されるべきであろうかと思う。それにしても、ソネットという詩形美と、ロマン派の詩人たちとは、全く奇妙な取り合わせである。と言うのは、前者は形式の均整や、表現の正確や、約束など主知的な法則を重んじたものであり、後者は情熱や、想像の奔放をなによ

り重要視する詩人たちであったからである。

殊の外、ジョン・キーツのソネットはオード (*Odes*) と同様、絶品である。ジョン・キーツはイギリスのロマン派の詩人たちの中でも、最も若くしてこの世を去った詩人であって、一言で指摘すると、「静と美と夢」の詩人であったろうかと思う。また「美と愛と魂と自由の巡礼者」であったと言いかえてもよいのであるが...。と言うのは、『エンディミオン』 (*Endymion, 1818*) の中に—“A thing of beauty is a joy forever” (「美しきものは永遠の喜びである」)—と歌い上げており、また「或るギリシアのつぼに寄せて」 (“Ode on a Grecian Urn”, 1819) の中に,—“Beauty is truth, truth beauty” (「美は真であり、真は美である」)—とうたい示しており、更に「あるナイチンゲールに寄せて」

(“Ode to a Nightingale”, 1818) の中に,—“My heart aches” (「この僕の心が痛む」)—とうたい伝えているからである。思うに、ジョン・キーツは正に、「まことの感覚の美を追求」した、いわゆる「美の使徒」キーツであったと言えようか。

それでは、ここに「美と愛の使徒」ジョン・キーツのほとんど晩年の制作であると言われている、白眉の一篇のソネットを紹介しておこう。これは1819年に創られた14行詩である。題は、「あの日は過ぎ去った」 (“The Day is Gone”) という玉詩であり、また問題の含んだソネットなのである。しかし、紙数の制限もあるので、分割してこの問題を論じてゆきたいと思う。

さて、ロマン派の詩人ジョン・キーツはこう歌い上げるのである。—

The day is gone, and all its sweets are gone !
 Sweet voice, sweet lips, soft hand, and softer breast,
 Warm breath, light whisper, tender semi-tone,
 Bright eyes, accomplish'd shape, and lang'rous waist !
 Faded the flower and all its budded charms,
 Faded the sight of beauty from my eyes,
 Faded the shape of beauty from my arms,
 Faded the voice, warmth, whiteness, paradise —
 Vanish'd unseasonably at shut of eve,
 When the dusk holiday — or holineight
 Of fragrant — curtain'd love begins to weave
 The woof of darkness thick, for hid delight ;
 But, as I've read love's missal through to-day,
 He'll let me sleep seeing I fast and pray.

—と云うのがこれである。これは、いわゆる、シェークスピア・ソネットである。念のために、この14行詩の「脚韻」をみると、—「abab / cdcd / efef / gg」—といった風に押韻されているからである。心静かに口遊んでみると、勿論、「弱強調5歩律」のリズムが使用されていて、「恋人との、或りし日の思い出」がはかなく、しかも高らかに歌い上げられているソネットなのである。

元来、「弱強調」という韻律 (*metre*) は、イギリスの詩歌の主要なリズムなのである。別けても、

この「弱強調5歩律」は、「4歩律」 (*tetrametre*) とともに、休止する必要もなく、いかにも自然に流動するリズムである。と言うのは、これはイギリス人の呼吸の長さによく合った調べであり、しかも彼らの生理的な条件に基づいたリズムであるからである。また彼らの心理的にも、何らかの圧迫を感じる事もなく、のびやかに朗読することのできる、韻律の長さであるからである。荘重な律動にのって、時には「行内休止」 (*caesura*) や、「句跨」 (*enjambment*) などの打巧を、この「弱強調5

歩律」に試みてみると、新に清新な変化を創り得て、ややもすると起りやすい単調さを打破して、長編的にも耐えうるリズムとなるのである。それ故に「弱強調5歩律」は、別に「英雄詩」、あるいは、「史詩」(heroic verse)とも呼ばれているのであって、また英雄物語りを伝える「叙事詩」(epic)にもよく適用されるリズムでもあるのだ。たとえば、チャウサー (Geoffrey Chaucer, 1340? - 1400) の『トロイルスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*, c. 1385) はまさに、「弱強調5歩律」というイギリス詩歌の基本的韻律を備えていて、しかも脚韻も正確に押韻していて、更に「英雄対韻句」(heroic couplet)の基本型を明示している作品なのである。これは英語のリズムといい、表現力といい、豊かに成熟している作品であるから、是非とも一読をおすすめしたいものである。

「脚韻」をもう少し詳しく眺めてみる事にした。重複するが、—「abab / cdcd / efef / gg」—といったイギリス風の押韻に組立てられているのである。念のために、「最初の4行」の脚韻を見てみると、—“gone, breast, tone, waist” —と押韻されている。問題になるのは、第1行目の“gone”〔gɔ:n〕と、第3行目の“tone”〔toun〕の押韻である。一方は長母音であり、他方は二重母音なのであるのだが、しかし、よく見ると、両方とも、spellingは全く同じであるのに、注目しよう。このような脚韻は、別に「視覚韻」(Eye or Visual rhyme)と言われているもので、これは spellingが同じであるがために、視覚的に rhymeのすがたを見せているからである。しかし、発音は異なるものである。これは、別に“Spelling rhyme”とも言われているのだ。たとえば、—brood〔bru:d〕, blood〔blʌd〕—とか、あるいは、—seven〔sɛvn〕, even〔i:vŋ〕—と言った風にしばしば、詩歌の中に散見する、視覚韻なのである。これは勿論、good rhymeではない。

「2番目の4行」の脚韻を調べてみると、—“charms, eyes, arms, paradise” —と言った風に押韻されているのだ。問題になるのは、第6行目の“eyes”〔aiz〕と、第8行目の“paradise”〔pæˈrədaɪs〕の押韻であろうが、しかし、このような〔z〕〔s〕とい

う子音の「類似の音」はある程度許されているものなのである。たとえば、—express〔iksprɛs〕, displace〔displɛis〕—と言った風に、母音〔e〕,〔ei〕の押韻もまた、子音のそれと同じように、「類似の音」として許容されているもので、これは別に、「不完全韻」(imperfect rhyme)と言われているものである。

次に、「3番目の4行」の脚韻を考察してみることにして。詩人キーツは、—“eve, holineight, weave, delight” —と押韻しているのだ。これは、ご覧の通り、全く一糸乱れる事もなく、「完全韻」(perfect rhyme)なのである。完璧な脚韻である。それでは「最後の2行」の脚韻は、と言うと—“today, pray” —と言う風に押韻されているのだ。これもまた「完全韻」なのである。このように全体の「脚韻」構成を眺めてみると、見事な組立てである、と言えようか。「完全韻」あり、「不完全韻」あり、その上「視覚韻」ありで、なかなか工夫された押韻である。しかも、各行の脚韻はすべて、「男性韻」(masculine rhyme)なのであるから、勇ましい限りである。それも時には雄大に「愛の情」を奏で上げたり、また時には荘厳に奏で上げているのもまた、見事である。

詩的工夫と言え、詩人ジョン・キーツはリズムの上で、とても重要な変化を試みているのである。これは詩人キーツのキーツなりの、清新の変化なのである。たとえば、「2番目の4行」の世界の各行の歌い出しと、「3番目の4行」の世界のうちの前半の2行のそれぞれの歌い出しが、ともに、「強弱調」(trochee)になっていると言うのが、これである。すなわち—

Faded the flower... —「強弱／弱強 ...」

Faded the sight... —「強弱／弱強 ...」

Faded the shape... —「強弱／弱強 ...」

Faded the voice... —「強弱／弱強 ...」

Vanish'd... —「強弱／ ...」

When the... —「強弱／ ...」

—と言う風に、各行の歌い出しが「強弱調」に変

化していることに、特に注目したい。これもまた、ややもすると単調に流動する韻律を嫌って、新味にして、新奇な変化を意図したものである。これが、“The Day is Gone”と題するこのソネットの、リズムの上での一大特長であり、詩人ジョン・キーツのキーツらしい一大詩的工夫によるものである、と言えようか。

「強弱調」の韻律は、勿論、「弱強調」のそれとは全く正反対のリズムを採るものである。“Trochee”（「強弱調」という語は、もと、ラテン語の“trochaeus”から借入した語であって、このラテン語の“trochaeus”はギリシア語の“τροχῆαιος (poús)”から借入されたものなのである。原義は“running (foot)”と言う。これは、“trékhein”という動詞から派生したもので、“to run”という原義を有する語である。このギリシア語の動詞、“trékhein”は、どうも、「インド・ヨーロッパ語族」(IE)の*dhreg-から派生した語であるようである。古代アイルランド語の“droch”(=“wheel”)を思い併わせてみると、「快活な快速調」が本命のリズムを明示している、“trochee”であろうかと思われる。この「強弱調」というのは本来は、「下降律」(falling metre)であるから、自然に「弱音節」(thesis)で終止する。これは、「ゆるやかに律動が沈潜」してゆく、といった韻律である。

「嫋嫋とした余韻」を伝えるためには、この韻律が最適なのである。しかし、詩人の中にはそれを避けるために、しばしば行末の弱音節を切り捨ててしまう事もあるのである。それも、本然の“running metre”の姿を保ちながら…。

念のために、“Iambus”（「弱強調」）という語のルーツを紹介しておこう。これは、もと、ラテン語の“iambus”からそのまま借入した語であって、ギリシア語の“iambos”から借入されたものなのである。このギリシア語の“iambos”は、動詞の“iáptein”から派生したものである。原義は、“to assail (in words)”と言う。これは「(人・物)を猛烈に攻撃する」という意味を有する語であることを思い合わせてみると、「弱強調」は本来は、「勇壮活発な調べ」を明示しているリズムであると言えようか。

詩人ジョン・キーツは「弱強調5歩律」の基調を踏まえて、恋人の過去、現在、未来を切実にうたい上げているのである。しかも、キーツは「弱強調」と正反対の、いわゆる「強弱調」のリズムを詩中に、あえて使用しないではいられなかったと言うのも、哀れ深い限りである。それも、「起承転結」の「承」の世界と、「転」の前半の2行の世界に、それを使用しているのであるから、「嫋嫋とした愛の情の余韻」は、あまりにも不憫すぎる。たとえそれは束の間の余情であったとしても、それはただ一度限りの変化ではなくて、そのあとに、二度、三度、四度、五度、六度と繰り返されている「強弱調」である事に、注意したい。それはまるで後ろ髪を引かれる思いで、恋人との思い出のその日を切切とうたい上げないではいられなかった詩人キーツを思うに、ただ痛ましい限りである、と言うほかはない。「愛の終末」を壮重なりズムで歌い上げているのは、見事であるのだが、しかし、人間の弱さや、はかなさなどを思い併わせると、余りにも無慈悲な「愛の終焉」である、と言えようか。時々、どこからともなく詩人キーツの魂の嗚咽がそれも、跡絶えがちに聞こえてくるのも、一層哀れである。

「あの日は過ぎ去った」と題する、この絶唱の14行詩を精読してみると、特に、「3番目の4行」の最初の行、すなわち、—“Vanish'd unseasonably at shut of eve,”—という1行を玩味し返してみると、詩人キーツの「愛の終末」に寄せる悲愴までの絶望感が切実ではないか。「夜の帳がおりる」(“at shut of eve”)という、その日の終わりを告げながら、しかも、その語句の前に、「時をわきまえないで”(“unseasonably”)という副詞を使用しているのも、殊の外、痛ましい限りである。この副詞“unseasonably”は、勿論、動詞“vanished”を修飾するものであるが、しかし、それにしても、「季節はずれに」とか、「時機を誤って」という意味を有する副詞である事を思うに、2人の愛の終末もまた、何らかの、外部からの力が加わって、無理無体に引き裂かれた感が大である。このように、「時をわきまえないで」という副詞もまた然る事ながら、詩人キーツはその副詞の前に、“vanished”と

いう動詞を用いているのも、不憫である。これは、“to vanish”という自動詞の過去形(?)なのである。自動詞“to vanish”というのは、「(目に見えていたものが)消える」とか、「見えなくなる」とか、あるいは「姿を消す」という意味を有する動詞なのである。それも、同じ、“to disappear”という動詞と比べてみると、“to vanish”は“to disappear”よりも意味が強く、しかも、「突然消える」とか、「急速に消える」とか、あるいは、「すっかり消える」といったイメージを有する自動詞である事を思い出してみると、ここに「有無を言わせぬ」といった、無慈悲で、残酷な、2人の「愛の終末」が悲愴的にうたい示されているようで、一層、不憫でならなのだ。(未完)

参 考 文 献

- 1) Askwith (B.) *John Keats*. London:Collins, 1941.
- 2) Bate (W.J.) *John Keats*. (Harvard Univ.) 1978.
- 3) Blunden (E.) *Keats's Publisher. A Memoir of John Taylor*. London:J. Cape, 1940.
- 4) Finney (C.L.) *The Evolution of Keats's Poetry*. (Russell & Russell) 1964.
- 5) Guy Murchie *The Spirit of Place in Keats. sketches of persons and places known by him, and his reaction to them*. Newman Neame Limited, 1955.
- 6) Ryan (R.M.) *Keats. The Religious Sense*. (Princeton Univ.) 1976.
- 7) Sperry (S.) *Keats The Poet*. (Princeton Univ.) 1974.
- 8) Thorpe (C.D.) *The Mind of John Keats*. Oxford Univ. 1926.
- 9) Vendler (H.) *The Odes of John Keats*. (Harvard Univ.) 1983.
- 10) Ward (A.) *John Keats. The Making of a Poet*. London:Secker & Warburg, 1963.